

「梁山伯と祝英台」物語の文化空間

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050858

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「梁山伯と祝英台」物語の文化空間

上田 望

1. はじめに―「梁山伯と祝英台」を知っていますか？

「梁山伯と祝英台」の物語（以下、梁祝物語）は、中国の四大民間伝説（他の三つは「牛郎織女」「孟姜女」「白蛇伝」）の一つに数えられ、「東方（中国）のロミオとジュリエット」とも呼ばれているが、中国と長い文化交流の歴史を持つ日本でもこの物語の具体的な内容はおろか、名前すらも初めて聞いたという人がほとんどであろう。

梁祝物語には多くの異本があるためその内容を説明するのは容易ではないが、今日最も普及している越劇『梁山伯与祝英台』（以下、『梁祝』）に拠って梗概を記せば以下のようである。

祝英台は男装し学問を究めるために杭州へ行く途上、梁山伯と知り合って義兄弟の契りを結び、学舎で机を並べて三年間勉強する。祝英台の父が娘に早く家に帰ってくるよう催促してきたため、英台は老師の夫人に自分の本当の気持ちを伝え、梁山伯に嫁入りできるよう仲立ちをお願いする。また送別の際には実在しない妹にかこつけて早く訪ねてくるよう梁山伯に言い含める。しかし梁山伯が急いで祝家に駆けつけた時には、英台の父親は馬太守の息子馬文才に彼女を嫁がせることを決めてしまっていた。梁山伯と祝英台は高殿で再会し、自分たちの結婚に望みがなくなつたこ

とを嘆き悲しむ。梁山伯は家に戻ってまもなく病でみまかる。婚礼の日、英台の輿は回り道をして梁山伯の墓に立ち寄り、墓前で弔いをしているとにわかには雷鳴が轟き墓が大きく裂けた。英台がその中に身を躍らせると、二人は二匹の蝶と化し仲良く飛んでいった。

筆者は梁祝物語の誕生の地と言われる浙江省を伝統芸能の現地調査で訪れるたびに、地域の人々がこの物語に熱狂する様を目にしてきたが、これほど中国や東南アジアではよく知られている物語が日本では全くと言っていいほど市民権を得ていないのはなぜなのか、長い疑問であった。小文では梁祝物語の形成と展開についてこれまでの研究をもとに概略を紹介し、物語の世界展開と日本での受容が遅れた理由について臆見を述べることにした。

2. 梁祝物語の誕生と形成

梁祝物語の誕生から現在までの発展段階は、以下の三つに区分することができる。第一段階は物語が発生し、主に口頭伝承によって伝播していった形成期である。物語の中の時代である東晋から二人の恋人の悲劇は口頭で伝承され、時によっては書き留められた。梁祝物語の存在を確認できる最古の文献は初唐の梁載言の『十道四蕃志』であるが、残念なことに一行足らずの記述しかない。さらに時代が下って晩唐の『宣室志』には、上虞の祝氏の娘英台が男装して遊学した時に会稽の梁山伯と知り合い、後に梁山伯は祝英台を訪ね女性であることを知って求婚するが、すでに英台は馬氏の子息に嫁ぐことが決まっていた。梁山伯は鄞県（浙江省寧波）の県令になった

あと病死し県城の西に葬られ、祝英台は馬家に嫁ぐ時に梁山伯の墓に立ち寄り慟哭すると、地面が裂けて英台はそこに落ちて埋まってしまったため、晋の丞相謝安が義婦の墓として上奏したことが記されている。『宣室志』の物語は、①ヒロインの男装（とそれに伴う性別の誤解）、②ヒロインも墓に入って死ぬ悲劇的結末、という点で現行の梁祝物語とおおむね共通しており、物語の骨組みは千年以上前にすでに固まっていたことがわかる。また宋以前の物語に見える地名から、梁祝物語の原型はもともと上虞、会稽（紹興）、鄞（寧波）など浙江省の限られた地域で伝承されていたのではないかとの推定が働く。ただし『宣室志』の作者張讀はその官歴からみて特に浙江とは関わりがないことから、都長安かどこかで筆を執っていた時に彼の耳にもこの話が入るほど唐末には有名になっていたのであろう。

3. 梁祝物語の新たな展開

晩唐以前に物語の基本形が完成したと考えられる梁祝物語は、宋代以降、より広範囲に伝播する第二段階の展開期を迎える。この時期、口頭伝承のほか、小説や演劇、歌謡などの分野で二人が死んで蝶になるという新たな要素や、「陰府告状」と呼ばれる冥界裁判と大団円の結末が作り出されるなど、物語としては新たな展開を見せる。

宋代から中華民国初期にかけ等比級数的に梁祝物語の異本が増加していることは、梁祝物語を博搜し整理した路工編『梁祝故事説唱集』（上海出版公司、一九五五年）、銭南揚『梁祝戲劇輯存』

(上海古典文学出版社、一九五六年)、周静書編『梁祝文化大観』(中華書局、一九九九・二〇〇〇年、全四卷)などを繕けば一目瞭然である。『梁祝文化大観』には五四本の地方劇などの脚本、二五本の各種説唱の唱本、九二条の民間伝説などが採録されている。

展開期において瞠目すべき大きな変化の一つは、物語の終局において二人(の魂もしくは衣服の一部)がつかいの蝶へと姿を変える、「化蝶」という趣向である。「化蝶」の変遷については銭南揚の先行研究があり、それに拠れば晋の『搜神記』に韓凭の妻の着ていた服の袖が蝶と化す話柄が先に登場しており、唐代になると韓凭夫妻の魂が蝶になる話へと転化し、南宋になると梁祝物語でも主人公たちの「化蝶」現象があつたことを指摘する。さらに銭氏は、宋元明の寧波の県志などには「化蝶」について一切言及がないのに対し、江蘇宜興の県志には記述があることから、梁祝物語が宜興に伝播してから「化蝶」の話柄が加わり、清以降、寧波でも「化蝶」の話が一般的になつたのではないかという説を述べる。明末の文人馮夢龍の有名な白話小説集『古今小説』巻二八「李秀卿義結黃貞女」の枕で梁祝物語が使われており、ここでは祝英台は江蘇常州義興の人とされ、最後に蝶は二人の魂が化したものとする伝説を紹介している。明代後期に宜興周辺で成立した魂が蝶となる話柄が清代以降、寧波に逆輸入されるとしても不思議ではない。

もう一つの物語上の大きな改変は、二人の恋路を邪魔する敵役の馬が梁山伯を冥界で訴えるが、最終的に梁山伯と祝英台は転生して目出度く結ばれるという結末に改められた物語が出現したことである。時期を明らかにすることは困難であるが、清乾隆年間の弾詞『新編東調大双蝴蝶』(乾

隆三四年自序、道光三年文会堂補刊本)や『英台宝卷』(光緒三二年刊)などの説唱文学、地方劇の脚本でもハッピーエンドに改められたものが少なくない。またかなり唐突な転生という設定を強化するために二人は金童玉女の生まれ変わりとしているものもある。宝卷などの宗教芸能では悲劇的結末は忌避される傾向にあり、おそらく清代前期から中期にかけてハッピーエンドへの書き換えが語り物や演劇の世界で進行していったと考えられる。

物語の伝播する地域の拡大については、路曉農の『路曉農「梁祝」の起源与流变』(東南大学出版社、二〇一四年)に拠れば、寧波、上虞、杭州など浙江省東部から次第に江蘇、福建、安徽、河南、山東など各地へ拡散していったことが確かめられると言う。

また、梁祝物語はさらに海外にも広がっていった。朝鮮では高麗王朝時代に唐の羅鄴の「蛺蝶」詩とともに四三四字の梁祝物語が伝わっており、そこには祝英台の男装や二人が合葬されたこと、そして祝英台の衣の一部が蝶に化したストーリーも見える(周静書・施孝峰『梁祝文化論』、人民出版社、二〇一〇年、第五章「走向世界的梁祝文化」)。当時、寧波(明州)は高麗との交流の拠点であったことから、寧波から物語が高麗に伝播した可能性を周静書は示唆する。また、東南アジアは華僑によって早くからこの物語が持ち込まれたようであり、少し時代は下るが十九世紀以降、インドネシアやマレーシア(マラヤ)、シンガポールなどで翻訳や翻案物が出版されている。その中でもインドネシアは梁祝物語を世界四大著名愛情悲劇の一つとみなし、様々な部族の言語で書物を作っている。一部の書では現代風アレンジするなどの大胆なリライトがおこなわれて

おり、たとえば一九九〇年に出たバリ語の書では、祝英台はオートバイに乗って杭州に行くという設定に変わっている（これについては、Salmon, Claudine 編『中国伝統祝英台在亜州』国際文化出版公司、一九八九年、に詳しい）。また、ベトナム（越南）や日本は古くから中国文化を受け入れてきた歴史のある国であるが、ベトナムで梁祝物語が広く知られるようになるのは一九五〇年代以降とされており、比較的最近である。日本に至っては更に新しく、やや知られるようになってきたきっかけは皇なつきの漫画『梁山伯と祝英台』（角川書店、一九九二年）とされ、その後、田中芳樹の小説『奔流』（祥伝社、一九九八年）や二〇〇二年に宝塚歌劇団が中国で最初に公演した「蝶・恋（ディエ・リエン）」でも梁祝物語を扱っている。また創作ではないが、中国で出た小説の翻訳として趙清閣・続三義著、渡辺明次訳『小説梁山伯と祝英台―日中対訳版』（華僑出版社、二〇〇六年）や周静書主編、渡辺明次訳『梁祝口承伝説集』などの労作がある。

4・梁祝物語の成熟と世界展開

中華民国後期から現代までの間、梁祝物語は越劇『梁祝』という一つの定本ができ、それをベースに様々なメディアを通して世界へと拡散していく第三段階の成熟期、新しい発展期を迎える。第三段階で特筆すべきは、①物語としての悲劇への回帰、②越劇界による「梁山伯と祝英台」劇の定本の完成、③映画という新しいメディアによる海外展開、④メディアミックスによる梁祝物語の更なる普及と經典化、という四つの大きな動向である。①②③について中華民国後期から一

九九〇年代までの梁祝物語の改変に関わる大きな出来事を時系列に沿って整理すれば以下のようになる。なお年表作成については范瑞娟「我演梁山伯」(『上海戲劇』一九六二年第八期)、丁一『越劇博覽』(国際炎黄文化出版社、二〇〇一年)、佐治俊彦『かくも美しく、かくもけげな——中国のタカラヅカ』越劇百年の夢(草の根出版会、二〇〇六年)、陳培仲『梁山伯与祝英台』導読(杜長勝主編『中国地方戯曲導読 壹』、学苑出版社、二〇一〇年)などを参照した。

一九一九年 馬潮水、王永春、白玉梅らによる越劇改革と演目の形成

もともと落地唱書にあった演目を唱本などに依拠して新しく『梁山伯』上中下三本を作る。陰府告状の場面を含み、蘇った主人公が結ばれる結末になっている。

一九二六年 最初の梁祝物語の映画『梁祝通史』が上海天一影片公司によって制作

近代時装劇の無声映画。悲劇の結末となっている。天一は邵氏兄弟が上海に設立した映画会社であり、本作品は南洋各地で放映されて梁祝物語の伝播に大きな役割を果たした。

一九三九年 袁雪芬(一九二二年—二〇一一年)馬樟花とともに越劇『梁祝哀史』を上演

一九四〇年 中国聯美影片公司在岳楓監督を起用し、有声映画『梁祝』を制作

一九四四年 袁雪芬と范瑞娟の口述をもとに脚本作家の南薇が越劇『梁祝哀史』を整理

一九四九年 梁山伯を范、祝英台を傅が演ずる越劇『梁祝』が北京懷仁堂にて上演

脚本は『梁祝文化大観』などに収められており、従前の悲劇的な結末に改められている。

一九五二年 五月五日に「戯曲改革工作に関する指示」が出され、越劇『梁祝』を改編
袁と范が口述したものを徐進、成容らが共同で整理した『梁祝』が完成する。

一九五二年 越劇『梁祝』は第一届全国戯曲観摩演出大会で脚本賞や演出一等賞などを受賞

一九五三年 中華人民共和国建国後最初のカラー映画作品となる『梁祝』を制作

映画は袁雪芬と范瑞娟の二人が主演。中国国内では千を超える会場で上映され、観客動員数は一五五万人以上、香港では延べ一八七日上映され、六五万人以上を動員したと言われる。

一九五四年 許広平を団長とする越劇の海外公演実施（訪問先は東ドイツとソ連）

同年、映画『梁祝』をチェコの国際映画祭に出品し、音楽賞を受賞

なお周恩来が記者に紹介する際、タイトルを中国的『羅密欧与朱麗葉』と訳したとされる。

一九六三年 香港邵氏兄弟有限公司が李翰祥監督、主役に凌波、樂蒂ら明星を起用し、黄梅戲の演出を取り入れた「黄梅調電影」の『梁祝』を制作

一九八五年 范が梁山伯、傅が祝英台の配役で電視越劇連続劇『梁祝』を制作

一九九四年 嘉禾电影有限公司が徐克監督を起用し『梁祝』を制作

梁山伯を慕う若者を登場させる以外は結末など古典的なストーリーになっている。

この時期、越劇や映画において脚本から卑猥な描写や迷信、消極的な運命論などが取り除かれ、結末はもとの悲劇的な殉死の場面に書き改められていく。特に一九三九年頃から袁雪芬らが越劇

の各種改革に着手し、愛情悲劇の主題を強化した梁祝物語の決定版とも言える越劇『梁祝』を作り上げた功績は大きい。

梁祝物語の映画化は二〇年代から行われているが、悲劇の結末が共通するだけで演出や物語の解釈にはばらつきがある。しかしどの映画も興行的には成功を収めており、複製可能な娯楽をいつでも人々に提供できるようにしたという意味でこちらも物語の普及への貢献は小さくない。

また物語の普及に一役買ったのは映画だけではない。一九五一年に越劇『梁祝』の定本が完成したことで、越劇の物語は京劇など他の演劇ジャンルに移植される。一九五九年に完成したバイオリン協奏曲『梁祝』は越劇の音楽の影響を受けて作曲されたものであり、さらにバイオリン協奏曲から刺激を受けて、一九八二年にはバレエ『梁祝』も制作されている。アニメーションについてはやや遅いが、二〇〇三年の『梁祝』（上海美術電影制片廠）がアニメ化に先鞭を付け、その後、様々なアニメや漫画、児童向け図書が発行され、視聴者・読者層の拡大につながっている。

5. 結びにかえて

梁祝物語はおそらく寧波か杭州あたりで発生した不合理で悲しい事件を下敷きとしていたであろう。それが伝承と再創作を繰り返す中で、近代においていくつかの運にも恵まれ、「中国のロミオとジュリエット」「中国の四大民間伝説」という肩書きを得ることになったと考えられる。

袁雪芬という天才が越劇改革を推し進めたこと、袁雪芬たちが協力して梁祝物語の越劇脚本の

決定版を作り出したこと、越劇界の周辺に中国共産党系の知識人がいて袁雪芬らに理解を示してくれたこと、周恩来をはじめ中国共産党の高い評価を得、新中国で最初のカラー映画作品になったこと等々、こうした条件が一つか二つでも欠けていたら、四大民間伝説の選に漏れ、数多ある民間伝承の一つに終わっていたかもしれない。

日本の受容に関しては、近代以前には翻訳などを通じて紹介される機会がなかったことが大きい。さらに言えば一九四〇年代末から梁祝物語が世界展開するなか、政治的な要因もあってそうした潮流とはほぼ無縁だったことも影響しているであろう。また男装や「すれ違い」などの設定、ほとんど情死とも言える衝撃的な結末などメロドラマ風の物語が日本人の嗜好にあわなかった可能性も考えられるが、今後、日本と中国の比較文学的な視座から引き続きこの問題にアプローチしていくことにしたい。

今日、墳墓、廟などの梁祝物語の関連史跡が保存されている都市は、寧波市、上虞市、杭州市のほか、汝南県、宜興市、濟寧市などがあり、上記の四省六都市は梁祝伝説のユネスコの無形文化遺産リストへの登録を目指し、まずはその第一歩として二〇〇六年に連名で中国の「第一批国家級非物質文化遺産名録」への登録を申請し「民間文学」の分野で見事採択されている。今後、越劇『梁祝』がさまざま要因で經典化していく可能性が高いが、梁祝物語とそれを取り巻く環境がどのように変わっていくのか、または変わらないのか、しばらくは梁祝物語から目が離せない。